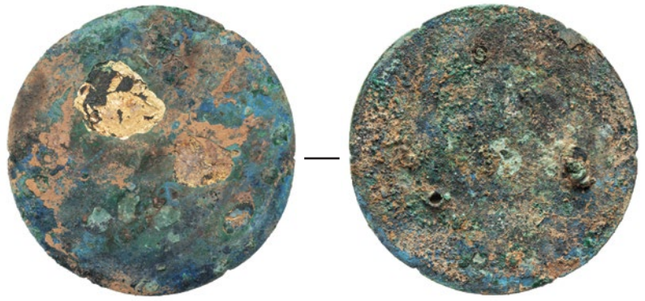
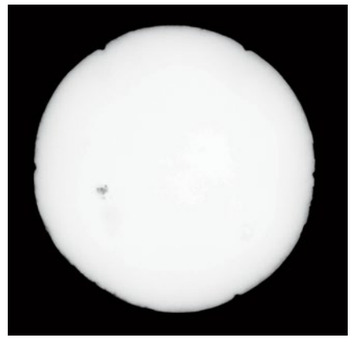
高松塚古墳出土品（重要文化財）

大刀の山形金物（唐草走獣文透彫金具）　※原寸の２倍



棺の飾金具（金銅製円形金具）外面（左）と内面（右）　※原寸大



円形金具のX線写真　※原寸大
金具の縁に花弁をあらわす切り込みがあるのがわかります

高松塚古墳の出土品

高松塚古墳壁画が発見された1972年の発掘調査で出土した資料は、1974年に重要文化財に指定され、飛鳥資料館で保管・展示公開されてきました。石室内およびその周辺からは、海獣葡萄鏡、銀製刀装具、玉類等の副葬品とともに、漆塗の木棺片やその飾金具、釘類が出土しています。

壁画発見50周年を迎えるにあたり、出土品についてあらためて詳しく再調査をおこなったところ、３本の小釘が打ち付けられた円形の棺金具全６点のうち、１点に痕跡的ながら花弁を表現したわずかな切り込みがあることがわかりました。高松塚古墳の近隣に所在するマルコ山古墳やキトラ古墳では、同様に３本の小釘をもつ花弁形金具が出土しており、以前から関連性が指摘されてきました。今回、１点のみながら、花弁の表現がみつかったことで、高松塚古墳の円形金具も花弁形金具の流れを汲むものであることが明確になりました。

科学分析の結果、円形金具の内面には、棺内面に塗られた水銀朱やその下地の鉛白が転写されて残っていることが判明しました。円形（花弁形）金具は棺内面に装着するもので、棺外面の飾金具を装着・固定するために通す軸棒の先端が内面側に突き出した部分を覆い隠す目的で使用された部品であることがあきらかになりました。壁画発見50周年の節目に、高松塚古墳の実像に迫る重要な成果を得ることができました。

（都城発掘調査部　廣瀬 覚）